

「高校再編」が 問いかけるもの

最近の10年間におよび全国的な「高校再編」。総合学科・単位制普通科・多部制・通える通信制など、さまざまな単位制を基調とする新タイプの高校がつくられてきた。そのなかには、不登校の生徒が通える高校づくりの試行もあった。

新卒就職↓日本的雇用（企業内教育）というルートの解体を根本原因とするこの高校再編は、全体として、どう考えるべきなのか。

過疎の地域における統廃合は、明らかに通学条件を悪化させた。都市部における高校再編では、伝統ある学校をいくつもつぶし、納得いく説明のないまま新タイプの学校をつぎつぎと開設してしまった。長期不況の影響で、私立高校に進学させる困難が増し、結果的に、全日制高校への進学者を大幅に減らしてしまった。統廃合の高校再編には、経済効率を最優先させる原理が強く働いているように思われる。

教職員はどうか。この高校再編で、多くの教職員は、これまでに経験のない教育活動を求められたが、それは上意下達の管理統制的な職員体制づくりと並行してすすめられたので、多忙を余儀なくされ、仕事は自らの意欲を削ぐものを感じられることが多くなった。

本号は、戦後における高校教育の歴史と高校再編の実態に目を向け、あわせて、この現実の下でとりくまれてきている意欲的な実践や学校づくりを紹介し、実践の展望を提示してみた。高校教育とは何かを、「高校再編」下で考える一助としていただきたい。